



TITLE:

「社会主義革命の退行可能性」にかんするノート

AUTHOR(S):

上島, 武

CITATION:

上島, 武. 「社会主義革命の退行可能性」にかんするノート. 経済論叢
1981, 127(1): 69-86

ISSUE DATE:

1981-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/133853>

RIGHT:

經濟論叢

第127卷 第1号

木原正雄教授記念號

献 辞	中 村 哲	
計画化理論と財政問題	池 上 惇	1
連合企業組織形態について	高 昇 孝	14
「自主管理型社会的所有」論の諸問題	長 砂 實	30
「生産の社会化」と社会主義的所有	芦 田 文 夫	49
「社会主義革命の退行可能性」 にかんするノート	上 島 武	69
中国經濟管理制度改革の構想と試行	井 手 啓 二	87
現代資本主義の生産力構造	北 村 洋 基	106

木原正雄 教授 略歴・著作目録

昭和56年1月

京都大學經濟學會

「社会主義革命の退行可能性」に かんするノート

上 島 武

1858年10月8日、マルクスはエンゲルス宛の手紙でこう書いている。「われわれにとってむずかしい問題は次の問題だ。大陸において革命は切迫しており、そしてまたすぐに社会主義的特徴を帯びるだろう。この小さな隅におけるこの革命が、それよりもはるかに広大な地域においてブルジョア社会の動きが上昇的であるからには、必然的におしつぶされることになりはしないだろうか。」¹⁾

マルクスは西ヨーロッパの革命が孤立することによって挫折するかもしれないという危惧の念をあらわしている。だが、この危惧がはじめて現実的な姿をとってあらわれるのは、この時から60年以上経過した、それもロシアにおいてであった。ロシア革命は、資本主義世界が「上昇的」ではなく「下降的」となった時代——帝国主義戦争と社会主義革命の時代——の産物であったがゆえに、ただちに「おしつぶされる」ことはなかった。しかし、資本主義諸列強による干渉をかわり抜けて切り抜けたものの、以後、長期にわたって孤立状態が続いたこと、資本主義世界もただちに衰退へむかうことなく生産力の発展を実現したことは、この革命にたいする重大な外圧として作用し続け、いくたびとなく革命の進展に脅威を与えることになった。以下に私が検討しようとするのはこの問題それ自体ではなく、これと深くかかわっているが一応これとは区別されるもうひとつの問題、すなわち、革命が後進国で起こったことから生ずる固有の困難、それも、革命を継続し社会主義を建設する主体としての労働者階級の力

1) Karl Marx-Friedrich Engels, *Werke*, Band 29, S. 360. 邦訳の全集版では、この部分が「…ブルジョア社会の動きがまだ上昇的だから必ずしも弾圧される不可避性はないのではないかと」なっている(283ページ)。趣旨としてはもちろん、文章的にも誤訳であろう。

量が不足している場合に生じうる、また実際に生じた困難についてマルクス主義の創始者と後継者が何を語っていたかをふりかえり、これらが現代の社会主義を考察する上でいかなる意味をもつかをさぐることである。

I

1867年、マルクスは『資本論』序文で次のように書きしるす。「イギリスでは変革過程は手にとるように明らかである。この過程は、ある高さまで進めば、大陸にはね返ってくるにちがいない。それは、大陸では、労働者階級自身の発達の程度によって、あるいはより血なまぐさい形で、あるいはより人間的な形で進むであろう。だから、より高い動機は別としても、今日の支配階級は、労働者階級の発達を妨げる障害のうちで法律によって処理できるいっさいのものを除去することを、まさに彼ら自身の利害関係によって命ぜられているのである……社会は自然的な発展の諸段階を跳びこえることも法令で取り除くこともできない。しかし、その社会は、分娩の苦痛を短くし緩和することはできるのである。」²⁾ 最近、芝田進午氏も、「この命題は、中国の『文化大革命』からベトナム侵略にいたる一連の事態、またかつて肅清がおこなわれた他の多くの『社会主義』諸国の事態を把握するにあたって、重要な示唆をあたえる」³⁾と書く。まことに、1917年の革命以上に「資本論に反する革命」は、その後の「上からの革命」なのであった。

次に、晩年のエンゲルスはこう書く。「生産手段を手に入れて運転していくためには、われわれは、技術的に予備教育を受けた人びとを、しかも大量に必要とする。このような人びとをわれわれはもっていない……僕の予測するところでは、われわれは今後8～10年のあいだに若い技術者や医者や法律家や教師を十分に集めて、党員たちに工場や大農場を国民のために管理させるようになるだろう。そうすればわれわれの権力継承はまったく自然的であって、円滑に

2) 『資本論』全集、第23巻、10ページ。

3) 「現代と思想」第36号、95ページ。

解決される——相対的に。これに反して、もしわれわれが戦争によって時機尚早に権力を握るならば、技術家たちはわれわれの原理上の敵であって、彼らにそれができるところではわれわれを欺き裏切るだろう。われわれは彼らにたいして恐怖政治をおこなわなければならないが、それでもわれわれを欺くだろう。」⁴⁾ この一節は、同じエンゲルスの『ドイツ農民戦争』におけるあまりにも有名な「時機尚早の革命」規定⁵⁾に比し、これまであまり注目されることがなかった（福井孝治教授の遺稿、「プロレタリアートの独裁について」の中に適切な言及がある）⁶⁾。しかし、後者はどんなにグロテスクなまでに悲劇的な予言となっているにせよ、あくまで過去のブルジョア革命にかんするものであって、プロレタリア革命が実際にたどってきた運命を暗示するものとしては、とうてい前者に及ばない。「カードルがすべてを決定する」の標語にもかかわらず、あるいはこの標語のもとでくりひろげられた残酷な専門家集団への迫害や、「紅は専に優先」とか「一窮二白」といった悲惨な実践の記憶は今なおまなましい。

II

さて、ロシア革命の当事者たちは、この問題をどのように受けとめたであろうか。ここではブハーリンから始める。まず1921年の『史的唯物論』で彼はこう述べる。「労働者階級は生産力の下落と広範な大衆への物質的保障の欠如という条件のなかで勝利する。それゆえ『退化』への傾向、すなわち階級的萌芽として指導層が分離していく傾向は不可避免的に存在することになる。他面、その傾向は、それと対立するふたつの傾向、すなわち、ひとつには生産力の増大、またふたつには教育の独占の廃絶という傾向とによって相殺されるであろう。全体として労働者階級のなかから技術者と組織者が拡大再生産されることによ

4) 『全集』第38巻、158ページ。

5) 『全集』第7巻、409～410ページ。

6) 藤田敏三編『人 福井孝治』93～94ページ。

って、新しい階級区分が発生する可能性は根本からとり除かれる。どちらの傾向がより強力かによって、闘争の最終的結果もきまる。」⁷⁾冒頭の部分には、戦争=危機=崩壊=革命という、前年の『過渡期経済論』に濃厚にあらわれた戦時共産主義的思考が残っている。しかし間もなくブハーリンは、かの「退化」傾向をもっと一般的な枠組みの中へ置きかえて考察する。「資本主義体制の枠内において、プロレタリアートは未来の文化の天才的萌芽や、人類の文化のさらなる発展のきわめて大きな可能性等をつくりだす。しかし、この体制内においては彼らは文化的に抑圧された階級なのであって、全社会の組織化の準備を整えうるに至るほどにはその能力を発揮させることはありえない。彼らが用意準備できることは『旧世界の解体』である。『自己の性格を変革し』、成熟するということは、ただ社会の組織者としてある、その独裁期に入ってからしかできない。」⁸⁾

エンゲルスは、これをプロレタリア革命における宿命とは見なしていなかった。ただ、起こりうる「時機尚早の革命」が逢着する危険な状況のひとつであることに注意をうながしたのである。そして実際の経過はこのことを立証してしまった。ブハーリンは続ける。「行政管理者・国家管理者のカードル、あるいはまた、全般的な文化的訓練を受けて、そのような仕事に対して準備がほとんどできているカードルについては、ブルジョアジーは手もとに持っている。しかし、それはプロレタリアートにとっては長期の経験によって学ぶしかない。そこで彼らは一定の発展段階のうちでは敵階級の力をかなり利用しなければならない。」⁹⁾

これと同じころ、レーニンも同じようなことを述べている。「この1年間に国家はわれわれの思うように動いてきたであろうか？ いや、そうではなかった。では国家はどう動いたか？ 自動車のハンドルをにぎっている人の思うよ

7) ブハーリン、佐野勝隆・石川晃弘訳『史的唯物論』青木書店、406ページ。

8) ブハーリン、「ブルジョア革命とプロレタリア革命」『著作選』第2巻、現代思潮社、32ページ。

9) 同上、39ページ。

うな方向にはかならずしも走らず、それとは全然ちがった方向に走っていくような場合と同じであった。』¹⁰⁾何故このようなことが起こったのか？ 有名ではあるがあまり真剣に聞かれず、はては誤解され、悪用される一節でレーニンは答える。「ロシアのプロレタリア国家の手にある経済力は、共産主義への移行を保障するのにまったく十分である。では何が不足しているのか？ 何が不足しているかは明らかである。統治にあたる共産主義者の層に文化性が不足しているのである……ここではわれわれが子供のときに歴史の授業で聞いた話と似たことが起こった。ある民族が他の民族を征服することはしばしばあったが、征服した民族が征服された民族よりも文化的な場合は、征服した民族は自分の文化を征服された民族におしつける。だが、その反対の場合には、被征服者が自分の文化を征服者におしつけることがしばしばおこる。ロシア社会主義連邦ソビエト共和国の首都でもこれに似たことがおこらなかったろうか……わが責任ある共産主義的活動家には統治する能力が欠けているからである。自分では指導しているつもりでも、実際には指導されているのである。』¹¹⁾

レーニンにとって、かかる状況は危険きわまりないものであった。だが、それは何か宿命的なものでもなかった。責任ある活動家がこのことを率直に認め、コムチヴェンストヴォ（共産党員のうぬぼれ）を捨て、文化を学び、統治を学び、商業を学び、農民を満足させることを学びさえすれば、克服することが可能であるという楽観主義を最後まで放棄しなかった。とは言え、これらが実に巨大で困難な事業であることも彼は熟知していた。このジレンマは、のちにレーニンを次のような一種の洞察というよりも、諦観にみちびいた。「社会主義を建設するために一定の文化水準（とはいえ、この一定の『文化水準』がどんなものであるかはだれにも言えない。なぜなら、それは西ヨーロッパ諸国のひとつひとつでちがっているから）が必要ならば、なぜ、この一定の水準の前提を、まず革命的方法で獲得することからはじめ、そのあとで労働権力とソビエ

10) レーニン、「第11回党大会報告」『全集』第33巻、283ページ。

11) 同上、293～294ページ。

ト制度をもとにして、他の国民に追いつくために前進してはいけなないのであるうか。」¹²⁾レーニンの不幸は、この命題が他の片言隻語とともに、彼の後継者たち——「かつての知識人にかわって、行政的有能と粗野を兼備し、上からの規律への盲目的服従を最高の特性と心得る知的ビグミー」¹³⁾——によって最大限、悪用されたことであった。「史的唯物論の発展において世界第一の国、理論家たちの多彩と活力ですべてのヨーロッパ諸国を凌駕していたこの国が10年もたたぬうちに半文盲的な泥沼に変わり果て、検閲の重圧とプロパガンダの残忍さによってのみ比類を絶する国となってしまった。」¹⁴⁾

さて、多彩のうちにあって最も活力と才気にあふれるブハーリンはさらに続ける。勝利したプロレタリアートの文化的後進性のゆえに、「プロレタリア革命には不可避的な、哲学用語で言う『内在的な』最大の危険性を内包していることは否定できない。われわれにとって問題となるのは、プロレタリア国家およびプロレタリア党の変質の危険性である。」¹⁵⁾問題は旧支配階級、旧インテリゲンチヤの影響力だけではない。「行政管理指導者カードル一般に対して、普通の労働者に対するよりもはるかに多量の消費手段が必要いかに関係なく分配されるような状況になれば、労働大衆の文化的後進性は、とくに全般的窮乏状態と重なれば、労働者によって労働者の中から選びだされたカードル階層の一部が、きわめて著しく大衆から遊離する危険性を生みだす。」¹⁶⁾ここでは、先の『史的唯物論』で表明された危機が一段とエスカレートしていることがわかる。「出身の労働者性とかプロレタリア的モラルを主張するだけでは、このような危険の可能性に太刀うちできる議論として使いものにならない。なぜならば、現代のように壮大な社会的大変動の時代においては、古い諸階級の一定部分が完全に形態変化をとげたり、新しい階級を形成してしまうということは原

12) レーニン、「わが革命について」『全集』第33巻、499ページ。

13) 浜内謙、『現代社会主義の省察』岩波書店、176ページ。

14) P. Anderson, *Considerations on Western Marxism*, p. 20.

15) ブハーリン、『著作選』第2巻、39ページ。

16) 同上、42ページ。

理的に決してありえないことではなく……このような場合、大衆から『遊離した』カードル労働者は、指揮者たる職務上の同僚のような文化的な層に同化し、これといっしょになって、新しい支配階級の胎児に転化しうる。』¹⁷⁾これとほとんど同一の表現は翌1923年の『プロレタリア革命と文化』にもあらわれる¹⁸⁾。

ブハーリン伝の作者は、これを「率直であるばかりでなく、正統マルクス主義の階級定義から暗黙のうちにはずれているという点で注目される」と評し、「ミロヴァン・ジラスの『新しい階級』が、階級のカテゴリーを修正してそれをソビエト社会に適用するより30年も前に、ブハーリンは『新しい支配階級』——私有財産に基くのではなく、『独占的な』権威と特権に基く——の危険性を警告したのである」¹⁹⁾と述べている。言うまでもなく、ブハーリンもこの危険を絶対的なものとみなしていたわけではない。「われわれの任務は、かの搾取関係への『進化的』逆転を絶対に許さないということにある」²⁰⁾として、文化・技術の獲得のための一大闘争を呼びかけるのである。そして彼はその後も機会あるごとに、同じテーマをくりかえし表明する。1926年初めのレニングラード党協議会は、新反対派の糾弾・追放集会にほかならなかったし、ブハーリン自身も、その急先鋒をつとめた。にもかかわらず、同時に彼は「被選出党職員を上から任命される指揮官によっておきかえるやりかたをなげき、これがやがて機構における過度の硬直、機構の石化をもたらし得るであろうと指摘したし、革命十周年記念日には、以前の労働者が革命的階級の一員たることをやめ、新たなブルジョア的階層、新たな行政官吏層と多くの点で結びつき、かくして大衆の願いや関心とは天と地ほどに離れ去っている状況に言及した」²¹⁾のであった。

この側面をとって見るかぎり、ブハーリンを単純に右翼に位置づけるのは正

17) 同上、42～43ページ。

18) ブハーリン、佐野学・西雅雄編『プロレタリア革命と文化』白楊社、55～58ページ。

19) S. F. コーエン、塩川伸明訳『ブハーリンとボリシェヴィキ革命』未来社、180ページ。

20) ブハーリン『著作選』第2巻、43ページ。

21) A. Nove, *Political Economy and Soviet Socialism*, p. 88.

しくないという溪内教授の指摘²²⁾は妥当である。ブハーリンは本当に10年を過ぎた後も、かつての左翼共産主義者時代の信念を崩さなかったからである。とは言え、やはり、ブハーリンは少なくとも経済政策の次元に関するかぎり、明白な右派路線とみずからをあまりに強く結びつけていたし、それが彼の「左翼的心情」といかに調和しがたいものであるかに深く思いを寄せた形跡も見いだしがたい。また、大いに注目に値いするといってよい彼の反官僚主義的言辞も、党内に大きな反響をよぶことはなかった。大勢がもはやいかなともなしがたかったこともある。この大勢に抗してたたくには彼の人となり之余りにも適していなかったこともある。そして、この最後の事情の中には、ブハーリンが理論家としてはともかく、政治家としては一度も首尾一貫して反官僚主義闘争を行ったことがない、という事実がふくまれている²³⁾。ブハーリンに対するレーニンの批評——ソフトな蠅²⁴⁾——は当たっていたのである。

ここでわれわれは、一種の奇妙な「くいちがい」、または「ねじれ」現象を見いださないわけにはいかない。たとえどんなに不十分であったにせよ、ソビエトの官僚主義的変質の可能性についてブハーリンは明快な警告を発していた。それはコーエンの指摘する通り、純粋マルクス主義の枠を越える認識であった。とは言え、事実は事実であり、それは遠くエンゲルスにさかのぼるまでもなく、レーニンが別の言葉で警告したのと同じ状況をとらえていた。レーニンは「官僚主義的にゆがめられている労働者国家」という表現を、ほかならぬブハーリン（トロツキーも含めて）と論争する文書の中で、それも現在形で用いた²⁵⁾。一方、トロツキーは負けず劣らず反官僚主義の旗手であった。とは言え、彼は

22) 溪内謙、前掲書、175ページ。

23) 1921年にブハーリンは、「人類史は3つの段階に区分される、すなわち、母系社会、父系社会、書記系社会がそれである」という冗談をとばしたという。(M. Shachtman, *The Struggle for the New Course*, pp. 153~154.) このエピソードも、彼の反官僚闘争の真剣さのほどをいくぶん伝えている。

24) レーニン、「党の危機」『全集』第32巻、39ページ。

25) レーニン、「労働組合について、現在の情勢について、トロツキーの誤りにについて」『全集』第32巻、9ページ。

専門家問題、労働組合問題等を通じて、官僚的指導者の最右翼とみなされたし（レーニンは、これを「行政的側面への熱中」と、おだやかに、しかし疑いもなく痛烈に批判した）²⁶⁾、1923年以後、突如として反官僚闘争を展開したことが、彼の個人的野心の現われであるかに邪推された。だが、真の「ねじれ」は、その次にある。

トロツキーは周知のごとく、官僚主義の危険を、官僚それ自体が新たな支配階級・搾取階級となるという点には絶対に求めなかった。彼はまず、20年代、かの「決定的抗争」の時期において、ネップマン・クラーク、および、それらの予備軍である膨大な小ブルジョアジーがソビエト権力を「乗っとる」かもしれないとみた。プロレタリアートが質・量ともに強大で、その物質的基盤である大工業が健在であれば問題はないが、現実には正にその反対であった。だから、希望は、プロレタリア党が一貫してこの現実を改善するための政策をとることによりのみ存在した。トロイカ（ジノヴィエフ・カメネフ・スターリン）ならびにスターリン・ブハーリン・ルイコフの推進するネオ・ネップは、彼にとって、この希望をうちくたくものであると映った。したがって、革命の挫折は、新・旧ブルジョアジーによる権力奪還という形態をとることがなくとも、権力を掌握している党がプロレタリア的政策を放棄して、経済・社会への介入をやめ、現実を追従していれば、党は事実上、新・旧・未来のブルジョアジーの政策推進者となるにちがいない²⁷⁾。そして、いつの日にか、党は政治権力を本格的な形で喪失するかもしれない。局面がこの「しめくり」にまで至らずとも、その前段階だけであっても、事態は重大である。プロレタリアと大工業の利益はことごとく第二義的な領域に追いやられ、このこと自体が党の政治的弱体化を招き、最後の「しめくり」のために道をきよめるであろう。トロツキーが「テルミドル反動」と呼んだのは、正にこのような事態展開の可能性を指し

26) レーニン、「大会への手紙」『全集』第36巻、703ページ。

27) この論理は形式上、また形式的にのみ、毛沢東派による「走資派」批判に類似している。毛沢東らがソ連によって、トロツキストの再来とされたゆえんであるが、毛派の状況認識にはトロツキーと一致する点は皆無である。

ていたのである。そして、これがいかに逆説的に見えようと、予想が適中したのはトロツキーではなく、トロツキーによってテルミドール反動の推進者ともくされたブハーリンであった。正統マルクス主義に固執したトロツキーが誤っており、これを逸脱したブハーリンが正しかったのだろうか？

III

トロツキーの誤り、ブハーリンの正しさの程度を検討する前に、両名に先んじて革命の墮落を予言したマルクス主義的巨人と、進行しつつある墮落の社会的根源を分析した革命家について述べる必要がある。前者は言うまでもなくローザ・ルクセンブルク、後者はラコフスキーである。

ローザはロシア革命へのあつい期待と共感を表明しつつ、同時に不吉な懸念をも書きしるす。「政府の支持者たちだけのための、ある党の党員だけのための自由——彼らの数がどんなに多かるうとも——は、自由ではない。自由とは常に、考えを異にする人間の自由以外にはないのである……制約された自由をもつ諸国家の公共生活は、きわめて不十分で、きわめて貧弱で、きわめて図式的で、きわめて不毛だが、その理由は、そのような公共生活は民主主義を排除することによって、あらゆる精神的な富と進歩との生きた源泉をみずから遮断しているからである。この場合、政治的にそうであれば、経済的にも社会的にも同じことである。すべての人民大衆の参加が必要である。さもないれば社会主義は、1ダースの知識人たちの役所のテーブルから命令され、強制されることになるであろう。」²⁸⁾しかしながら、これは、ローザの批判を受けた当のレーニン自身の思想である。彼はもっと簡潔にこう断言する。「われわれにとって重要なことは、勤労者の全員をひとり残らず国家の統治に引き入れることである。これは、はなはだ困難な任務である。しかし、社会主義を少数者の手で、党の手で導入することはできない。社会主義を導入することは、幾千万人が自

28) ローザ・ルクセンブルク、「ロシア革命」佐藤昇編『社会主義の新展開』平凡社、75～76ページ。

分でそうすることを学びとった時に、彼らだけがなうることである。』²⁹⁾

したがって、彼女がレーニンに対して放った批判は、正確にはスターリンに向けられるという運命をになうことになった。「普通選挙、掣肘されない報道と集会との自由、自由な意見のたたかいなどがなければ、公共制度のどこにおいても生命は死滅し、あるいはいつわりの生命と化して、官僚主義だけが営みをつづけるであろう。公共的生命はしだいにその機能を停止してゆき、数十人の、尽きないエネルギーと無制限の理想主義とをもった党指導者が命令し、統治する。彼らのもとでは、実際には1ダースのすぐれた人間だけが指導しており、労働者階級のエリートがときどき集会に召集され、これら指導者たちの演説に拍手を送り、提出された諸決議に満場一致で賛成する。根本においては、それはつまり仲間だけの政治である。たしかに独裁にはちがいないが、プロレタリアートの独裁ではなくて一握りの政治家たちだけの独裁、すなわちブルジョアの意味での独裁、ジャコバン党支配の意味での独裁である。いや、まだある。こうした状態は、公共生活の野蛮化を招来せずにはおかない。すなわち、暗殺、人質の射殺など。』³⁰⁾

実際、ローザの警告は、その一字・一句が幾層倍もの規模をもってことごとく適中した。それは、ロシア革命の黙示録にほかならない。とは言え、ただ一点、適中しなかったことがあるとすれば、それは、「無制限の理想主義をもった指導者」、「労働者階級のエリート」という表象であり、そのようなものが現実、しかも長期にわたって存続するという予想である。ここで明らかに彼女は、フランス革命の記憶をたどっている。ロベスピエールを中心にジャコバン・クラブをかたちづくった高潔無私の革命家群像、かれらこそ、革命の守護神にして同時に護民官であった。しかし、その理想が革命の歴史的限界に衝突し、かの理想をそのまま実現すべき条件が存在しないことが明らかとなった時、彼らはテルミドールの運命を免れなかったではないか？

29) レーニン、「第7回党大会報告」『全集』第27巻、134ページ。

30) ローザ・ルクセンブルク、前掲書、77ページ。

だが、ここで留意すべきはそのことではない。問題は、ローザが多分に危機の念を抱いて予想した事態こそが、レーニンにとっては、最後の、唯一の希望だった、ということである。「労農監督部をどう改組すべきか」と「大会への手紙」などで表明されたいくつかの提案は、まさに結束した護民官集団の設立を訴えていたのである。この段階で、何故レーニンは7回大会の言葉——「ひとり残らず国家の統治に引き入れる」——をくりかえさなかったのだろうか。

その、不可能たることをさとしていたからである。『労働者階級の力』は無限ではない。^①労働者階級から出てくる新鮮な力の流入が今は弱く、時には非常に弱い……（しかし）世界にかつてなかった最大の努力をしたあとでは、荒廃した小農民的な国の労働者階級にとっては、階級脱落に大いに苦しんだ労働者階級にとっては、新しい力が成長し、たかまることができ、また古くて使いきったものが『修繕』されることができのために、なにがしかの時が必要である。1917～1921年の試練にみごとに耐えぬく力のあった軍事機構と国家機構をつくりだしたことは、現実の『労働者階級の力』を、それに引きずりこませ、手いっぱいさせ、そして消耗させてしまった巨大な事業^②である。このことを理解し、労働者階級の新しい力の増加がおくれる必然性、もっと正しく言えば、その不可避性を考慮にいれることが必要である。³¹⁾

レーニンは、真の意味で現実主義的な革命家であった。現実には適合しない空文句こそ、もっとも彼の忌むところであった。それが革命党、ひいては革命そのものをいかに深く傷つけることになるかを知り抜いていたからである。だから、レヴィンも次のように言う。「レーニンのエリート主義は、たんに政権の原動力がエリートであるような状況にたいして彼が適応していることを表現したものにすぎない。」³²⁾しかし、それにしても、レーニンの提案は他に現実的

31) В. И. Ленин, "Новые времена, старые ошибки в новом виде," ПСС, Том 44, стр. 106. 邦訳『全集』では下線①の部分が「労働者階級の力は無限である」となっている（第33巻、8ページ）。原文は、Но «силы рабочего класса» не безграничны。②の部分は「ひきこみ、とらえ、くみあげた偉大な事業」となっている（同上、9ページ）。原文は、Дело великое, занявшее, захватившее, истощившее... いずれも深刻な誤訳であり、①は典型的な「しくじり行為」である。

段をほとんど見出せなかったにせよ、将来、それも近い将来に生ずるであろう現実に対して有効なものとは言えなかった。レヴィンもこう続ける。「この領域ではレーニンの思想はいくつかの弱点をふくんでいた。彼は、間もなく権力の頂点において圧倒的になる危険な傾向を見てとることに失敗した。」³²⁾

この危険な傾向が既に圧倒的な現実となって姿をあらわした時、これを真正面から分析することを試みたのが、ラコフスキーである。1928年夏、彼はこう書きしるす。「おしよせるスキャンダルの大波のなかでも最も特徴的であり、最も危険であるのは、前代未聞の専横の現われの前に労働者大衆が消極的な態度をとっているということ、しかも非党员よりも党员大衆の間にその態度がより強いということです。権力掌握者にたいする恐怖のためにか、政治への無関心のゆえにか、かれらは抗議もせず黙ってみすごしたり、せいぜい不満をつぶやくにとどまっています……ここでは、その原因とそれを取り除く方策の問題がもっとも重要となってきます。この問題に根本的かつ科学的にアプローチし、全面的な分析を加えることが、いまやわれわれの義務です……これらの困難は、権力の『職業的危険』と呼ぶことができるでしょう。この階級が権力を握った時、その階級の一部分は権力の代理者になり変わります。かくて官僚制が生まれます。支配政党が資本主義的な蓄積をおこなうことが許されていないプロレタリア国家においては、先にのべた分化は、最初は機能的なものです、後には社会的なものへと変わってゆきます。階級的な分化と言っているのではありません。社会的な分化と言っているのです……権力が労働者階級にもちこんだ『機能上の』分化は、国家行政や国家経済で個人的な指導的任務を負わされた人びとの心理に変化をもたらし、その変化は、客観的ばかりか主観的にも、肉体的ばかりか精神的にも、かれらが同じ労働者階級の一部ではなくなるという程度にまで達しました。」³³⁾

32) 33) M. レヴィン、河合秀和訳『レーニンの最後の闘争』岩波書店、136ページ。

34) ラコフスキー、「革命に内在する危機」『現代の理論』第108号、118、123～124ページ。

労働者階級から分化し、労働者階級の一部でなくなった集団、それは、かつてブハーリンが「新しい支配階級の胎児」と呼んだものが現実姿をあらわしたものにほかならない。ラコフスキーは、これを新しい社会的カテゴリーとなつた「ソビエト官僚制と党官僚制」と名づける。しかも「ソビエト国家においては、ソビエト官僚制の果たす役割より党官僚制の果たす役割の方がずっと大きい」³⁵⁾と彼は断言するのであった。

IV

溪内教授が「卓抜な文章」³⁶⁾と評するラコフスキーの論文に、トロツキーは「非常な感銘をうけ、反対派に推奨した。だが、彼はラコフスキーの見解のいっそう深刻な、比較的悲観的な意味のあるものを見おとしたように思える。」³⁷⁾このドイッチャーの批評は全体としては当たっているが、そして、トロツキー自身、のちに構築する党・国家官僚論がラコフスキーの思考の延長線上にあることも否定できないことであるが、決定的なちがいは、この傾向、この危険をやはり宿命的なものと思えずかどうかに関っていた。ここでは、事態を別の角度から検討してみたい。

かつてレーニンが、労働者階級の再生には或る程度の時間がかかると述べた時、彼は、この時間の経過において生ずる、又は作用する、再生に逆行する要因を明らかに考慮していなかった。更に言えば、ネップの作動によって得られる大工業の復興が、そのままストレートに労働者階級の再生に連なるかどうか、また、実際に連なったかという問題がある。もし実際に連なったのであれば、経済的領域では雇用の拡大と実質賃銀の上昇となって現われ、政治的領域では党と労働者階級の結合の再強化となって（党官僚制の衰退）現われたはずである。

35) 同上、126ページ。

36) 溪内謙、前掲書、291ページ。

37) ドイッチャー、山西英一ほか訳『武力なき予言者トロツキー』新潮社、457ページ。

さしあたり前者について見れば、雇用は一部で拡大し（ネップの自然効果プラス初歩的計画化）、一部で停滞した（節約・合理化政策）。実質賃金の動態については、大工業の基幹部門たる重工業で、その回復がもっとも遅れた。シェーレ恐慌、商品不足が20年代の基調であることを見るまでもなく、労働者の状態は30年代にくらべてバラ色であったところではない。だが、これまであまり注意されることのなかったもうひとつの問題（再生にとって障害となった、という意味で）がある。それは E. H. カーが *Plight of Labour* と名づけた現象の中に含ませていた、国有企業内部における一般労働者の地位・権限の低さである³⁸⁾。「労働者反対派」から「労働者の真実」グループにいたる絶望的反抗が現実的有効性をもっていたとは思えないが、「農村に面を向け」、「ソビエトを活気づける」と同程度に「労働者を活気づける」運動があった形跡も認められない。後のトロツキストの中には、この点でレーニン、トロツキーが誤りを犯したとする者がいる。要するに、資本主義のもとで成立した生産・技術組織が、かかるものとしては生産関係に対して中立的なものとする傾向が強かったというのである³⁹⁾。

しかし、事の抽象的・理論的次元ではなく、その歴史的・具体的次元で見れば、かぎり、「労働者を活気づける」運動の前提はきわめてとぼしかったと言うべきである。労働者の胃の腑が絶えず緊張していた時、更には、この緊張から解放される可能性について労働者が幻想を持ち得なかった時、このような試みは、多分、空文句の羅列に帰着したであろう。国有企業における「奪権闘争」や、「革命をつかみ、生産をうながす」運動が何をもたらしたか、それは、既にあまりにもよく知られている。したがって、このような状況を現実に突破することができないかぎり、労働者の再生は不可能である。革命のよびおこした熱狂

38) Cf. E. H. Carr, *The Interregnum 1923-1924*, Chapter 2.

39) Cf. P. Bellis, *Marxism and the USSR. The Theory of Proletarian Dictatorship and the Marxist Analysis of Soviet Society*, pp. 220~222; C. Bettelheim, *Class Struggles in the USSR 1923-1930*, passim. ただし、この種の「レーニン・トロツキー批判」が往々にして「マルクス・エンゲルス批判」にまで及ぶことは教訓的である。

が大きく、この熱狂にひき入れられた大衆が多ければ多いほど、その反動もまた大きく、更に早い。トロツキーはこのことをラコフスキーより3年も前に認め、ラコフスキーより深い洞察をこめて書きしるした⁴⁰⁾。だからこそ、トロツキーが再三・再四、訴えたのが党の再生であったことは、彼もレーニンと同じく、そこにしか希望をもっていなかったことを示している。だから、「彼は問題を意識していたが解決策を示さなかった」⁴¹⁾わけではない、しかし、やはり「トロツキーはエリートの党概念に立脚している」⁴²⁾という批評はレーニンに対してと同様の意味で妥当するであろう。このように圧倒的に不利な状況にあって、労働者の再生をはかり、革命の退行をくいとめる社会的勢力は、およそ党以外に存在すべくもない。もし、党がその任に堪えないとすれば、結論は二つしかない。党自身が墮落したのか、それとも革命が時機尚早であったのか。

いささかの単純化をあえてすれば、それからのトロツキーの全活動が前者を証明し、後者を反駁することによりのみ捧げられた、と言うことができよう。後者を文字通りに肯定する時、そもそも十月革命は敗北を運命づけられたバリ・コンミュンか、マルクスが懸念した世界の一小隅における革命でしかなかったことになる。しかも、ロシアは1917年においてすら、1858年のイギリスの域に達していなかったとすれば尚更である。勿論、トロツキーがこれに反抗したのは、十月のヒーローたる名誉に関るからではなかった。資本主義世界は、これを全体として見れば、社会主義革命のために成熟しているというのが、レーニンと同様、彼の不動の信念であった。また、彼が中国革命に対してあれほどまでの関心を示したのも、レーニンの最後の論文に示された「東方世界の解放によるロシア革命の救済」に期待をかけたからであろう。

そればかりではない。もしもロシア革命が時機尚早であり、敗北を運命づけられているとしたら、レーニン主義（帝国主義は革命の前夜である）は勿論、

40) トロツキー、「革命と反革命にかんするテーゼ」ドイッチャー編、山西英一訳『永久革命の時代 トロツキー・アンソロジー』河出書房、150～151ページ。

41) G. ボッフア、G. マルチネ、佐藤義教訳『スターリン主義を語る』岩波新書、62ページ。

42) 同上、57ページ。

古典的マルクス主義（労働者階級の解放は労働者自身の事業である）さえもが誤っていたことになる。労働者階級はみずからを解放することができず、プロレタリア革命の後においても、なお別の種類、別の形態による搾取と支配を運命づけられていることにもなる。トロツキーがソビエト官僚制をあれほどまでに攻撃し、その打倒をすら呼びかけながら、ついに、それが新たな「支配・搾取階級」であるとする見解を最後まで拒絶し、官僚制の除去は、プロレタリア国家に一時的に寄生した非プロレタリア要素を取り除く一個の政治的革命にすぎないことを執拗にくりかえした理由もここにある。

もとより、問題は、教義としてのマルクス主義を擁護しうるかどうかのみに帰着しない。スターリンのもとで確立した党・国家官僚層なるものが、真に新たな階級としてみずからを確立しているか否かは、現実の労働者階級の死活の利害に関することである。トロツキーは、党と国家の政策を分析し、ソ連の社会・経済の変化と諸政策の関連をさぐり、官僚集団の機能・性格の解明に没頭する。得られた結論は言うまでもない。彼の最後の論集の一つに付された題名、『マルクス主義の擁護』が、これを象徴的に示している。

このように見てくれば、彼が「テルミドール反動」なる用語をふりまわしたことが、理論的にも政治的にも、いかに大きな誤りであったかがわかる。それは、彼と、その追隨者の運動を混乱させることにのみ役立った。どこに誤りの核心があるのか？ ソビエト社会の変質の性格を、この概念が反映しないからである。トロツキー自身、その後、この概念の指す意味を二転・三転させているだけに、彼がこれをいさぎよく放棄してしまわなかったことの方が不思議に思われる。本来の意義からすれば、テルミドールは、ブルジョア革命に対する反革命ではなく、行き過ぎた革命への是正であり、これにともなう革命の主要推進主体の交替である。また、トロツキーの予想とはことになって、「ソビエト・テルミドール」は、その後、農村における所有関係の変革、すなわち「上からの革命」にみちびいたのである。

とは言え、またしても逆説的ではあるが、彼がこれに固執したことは、彼が

ソ連において反革命が勝利したことを認めず、新たな支配階級の形成されたことを認めなかったことの結果であり、同時に、その原因となることができた。この逆説と、彼の厳格さを理解せず、理解する労を惜しんだ人びとが、すなわち、もろもろのトロツキズムの始祖となる。トロツキーはくりかえし、「私はトロツキストではない」と言わねばならぬこととなる。

かくして、解答をせまられている問題は次の通りである。「むだというむだを根絶する」⁴³⁾との、1923年のレーニンの綱領は、現在、どこまで実現しているか。同じことであるが、レーニン、トロツキー（ブハーリンやラコフスキーを含めて）が期待した労働者階級の再生は、現在、どの程度まで実現しているか。

43) レーニン、「量はすくなくとも、質のよいものを」『全集』第33巻、523ページ。